

「状況に埋め込まれた関係性」としての英語動詞知識 Deep Knowledge of English Verb as Situated Relations

福島宙輝*¹
Fukushima Hiroki

諏訪正樹*²
Suwa Masaki

*¹ 慶應義塾大学院政策・メディア研究科
Graduate School of Media and Governance, Keio University

*² 慶應義塾大学環境情報学部
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

How can English learners use verbs properly? What is so-called “deep knowledge of verb”? We argue that deep knowledge of English verb is a “situated relationship”. In this paper, we propose seven kinds of situated relations and discuss how those pieces of relations have been derived.

1. はじめに

本研究は、語彙知識の“深さ”に関する考察である。本稿を通して筆者は、英語動詞の「状況に埋め込まれた関係性」が動詞選択の重要な要因であるという仮説に基づき、語彙知識の“深さ”を構成する要素の一面として 7 つの関係性を提示する。詳細は 2 章に譲るが、それらは以下のとおりである。

- (1) 「動詞」vs. 「動詞」間に生起する知識
- (2) 「主語」× 「動詞」間に生起する知識
- (3) 「目的語」× 「動詞」間に生起する知識
- (4) 「主語」× 「目的語」× 「動詞」間に生起する知識
- (5) 「文脈」× 「動詞」間に生起する知識
- (6) 「視点」× 「動詞」間に生起する知識
- (7) 「構文」× 「動詞」間に生起する知識

これらの関係性は、筆者が高校生から大学生の被験者に対し英作文等の課題を与え、その回答から見出したものである。英作文において動詞を選択する際には、瞬時に文法や語彙に関する複合的知識が(暗黙的に)活用されている。この知識は回答者自身で気づくことは困難である。そのため、被験者が動詞選択時にどのような知識を活用しているか、あるいはどのような関係性に気付いていないかという点を、被験者との対話を通して筆者が見出したものである。

本稿ではこうして見出された 7 種の「状況に埋め込まれた関係性」の内容及びそれらを見出した実践例の一部を示す。

1.1 語彙知識に関する既往研究

語彙知識の研究は学習者個人の語彙総量—“広さ”—を測る研究が中心であった。しかし、語彙の広さを計測するテストは、高頻度の語の一つの意味しかテストしない。このような「どれだけ多くの語について、中心的な意味を知っているか」という語彙知識の量的側面だけでは、学習者の持つ語の知識を十分に測れているとは言えない。

こうした反省に立ち、近年になり一部の研究者([Read 2000, Nation 2001]など)によって、語の量的側面ではなく“深さ”としての質的側面を扱う動きが見られるようになった。ここでの質的側面とは、ある語に対して意味だけでなく発音、綴り、連語など実際に語を使用する際に必要となる知識のことである。

既往の“深さ”の研究では、単一の語についての「語の内部にある」知識ばかりが議論されてきた。連語として他の語との共起を

扱う研究もあるが、辞書に載るような定形表現としての共起を扱うにとどまっている。筆者は英語動詞の活用にあたっては、主語、目的語などの文の構成要素、あるいは文脈や視点などといったその動詞をとりまく“状況”に応じて動的に変化する共起関係を理解しておくことが、“深い”知識のためには重要であると考え。こうした知識を本研究では「状況に埋め込まれた関係性」とする。

1.2 本研究の目的

本研究では、英語動詞の語彙知識の深さとはどのような知識の集合体と考えられるかを「状況に埋め込まれた関係性」としてリスト化する。このリストは語彙学習、語彙指導において、どのような知識を学ぶべきかという指針を示すものとしての意義を持つ。例えば学習者にとっては自らの語彙知識を振り返り、どのような知識が足りていないかを自覚する一助となる。綴りは大丈夫か、発音、聞き取りはできるかといったレベルから、どのような語と共起することが多いかを理解しているか、などといったことがこのリストをもとに確認することができる。あるいは指導者にとっては、このリストをもとに学習者の語彙知識の深さを測るテストを作成することができるだろう。

英語動詞における語彙知識の深さのリストを作成するには、動詞と他の語がどのような関係性を持つかが重要である。語は常に文脈の中で意味づけられるものであり、他の語との関係性を無視して語ることはできない。特に動詞は他の文の要素を変数として関数的に意味づけられる[田中 2005]ため、どの動詞を使用すべきかは、文中の他の語との関係性のなかで決まる。

本研究では、英語動詞をドメインとして、語彙の使用知識における語と語の関係性を考察する。本研究は、語彙研究の新たなアプローチとして、動詞の使用知識における他の語との関係性という新たな視座を提唱するものである。

2. 「状況に埋め込まれた関係性」

2.1 「状況に埋め込まれた関係性」とは何か

本研究では[Nation, 2001]の指摘するような、表現の可変性の乏しい定型的共起関係ではなく、語彙選択のヴァリエーションと可能性が多様にある状況で、文脈や他の語の影響を受けてどのように学習者が動詞選択を行うかという点を分析する。筆者は、このように語と語の共起が文脈に応じて可変的な関係を「状況に埋め込まれた(situated)関係性」と呼ぶ。

では実際に「状況に埋め込まれた関係性」とはどのようなものだろうか。本研究では「状況に埋め込まれた関係性」のパターンを明らかにすべく実践を行った。そのパターンの解説は 6 章にて行

い、ここでは「状況に埋め込まれた関係性」とは何かを概説する。なお本研究では英語学習者を対象者とし、英語動詞における「状況に埋め込まれた関係性」の考察を行う。

例えば、「綱をつかみ、滑車を動かした」という文が現れた。ここで「つかむ」という動詞を訳す際には多様な表現可能性がある。しかし「綱」に対して「つかむ」を表す英語動詞は定型的な表現があるわけではない。「つかむ」に対応する英語は、catch, take, hold, seize, grasp, grip, clutch, grab など、多くの語が訳出可能である。

そしてこれらの中から表現者が動詞を選択する際には、様々な周辺の事象や文脈などが関与することとなる。綱の太さはどれだけか、綱をつかむ主語は誰か、つかんだ後に綱をどうするのか、つかむ際に身体はどのように動くのかなど、文をとりまく様々な状況が動詞の選択に影響を与える。

今回の井戸の綱の例であれば筆者は take を用いる。それは用意されているが自分のもとには無いものを、自分の空間に引き寄せるイメージがあるためである。だが「つかむ」についてはこれ以外にも例えば綱引きのように太い綱で、なかなか動かないようなものを動かそうとするのであれば grip を用い、動かそうとするものを動かさないようにするならば hold を用いるだろう。また視点から離れた場所にあるものを手にする場合には catch を使うなど様々な選択肢がある。こうした表現を試みるとき、「綱」と「つかむ」は(容認度という問題はあっても)定型的な表現関係ではなく、表現者の意図を含んで変化しうる関係である。表現者はこれらの中から自分が構成したい事態にもっとも寄り添うものを選択するのである。

どの文脈でどのような動詞が使えようかは、動詞ごとに使える条件がはっきりと定められているのではなく、まわりの語や文脈との関係性によって決まるものである。こうした状況の中に生じる関係性の具体的な議論を欠いては、語彙の使用知識を十分に語ることはできない。筆者の主張する「状況に埋め込まれた関係性」は、このようなまわりの語や文脈に応じた表現に関する知識を扱うものである。

筆者は実践を通して、7種類の「状況に埋め込まれた関係性」を見出した。これらは従来の研究では明らかにされてこなかった、英語動詞知識の「深さ」を構成する新たな一側面である。筆者はこれら7種類の「状況に埋め込まれた関係性」を、語彙知識の「深さ」を構成する要件と捉える。

本稿では紙面の都合上、例として(1)に絞って補足する。各項目の詳しい内容は[福島 2013]を参照されたい。

(1)の〈動詞〉vs.〈動詞〉間に生起する知識は、動詞と他の語との関係性を考える際には、ある動詞と他の動詞の関係性をまず考えなければならない。他の動詞とは基本的には動詞選択の際に選択肢にあがる類義的な動詞である。類義語との使い分けをどのように行なっていかは、まさに語と語の間に存在する知識であり、単一の動詞の内部のみからは発見できない知識である。

3. 「状況に埋め込まれた関係性」を見出す実践

3.1 関係性を発見する実践の方法

動詞と他の語との関係性の項目を作るにあたり、高校生から大学生の英語学習者を対象に実践を行う。実践は基本的には和文英訳の形式をとる。対象者の回答をもとに筆者が対象者と対話を行い、動詞の使用についてどのようなことに留意したかを聞き出す。

対話内容の分析で着目するのは、日本語に対して対象者がどのような根拠を持って動詞を選択するかである。本研究では、そのなかでも主語や目的語といった、文(脈)を構成する要素がどのように動詞の選択に関わってくるかに着目する。

対話時の質問内容と実践結果の分析にあたっては、[田中 2005]における動詞の「コア理論」を援用する。コア理論は、動詞

の意味は文中の他の語を変数として関数的に意味づけられるという意味観に立つ。本稿ではこのコア理論に立ちながら対話と対話内容の分析を行い、「単純であいまいな関数的図式」[田中 2006]としての動詞知識がどのように動詞選択に関与するかを考察する。

本研究における実践の対話ではコア理論を援用し、コアのレベルでの動詞の使い分けを問う質問を対象者に行うことで、動詞を決定するにあたり他の語とのどのような関係性から決定が行われるかを見出す。本稿ではそれらの実践を通して筆者が見出した動詞と他の語との関係性を、分析の段階でより文脈から独立した一般的な知識としての「状況に埋め込まれた関係性」としてリスト化し列挙する。分析にあたっては、コア理論に見られる動詞の意味観に立った分析を行う。

リストの元になるものは対話において対象者の話す内容である。対話中にはコア理論を念頭に動詞選択の根拠を筆者が尋ね、対象者はその根拠を文の置かれた状況の様々な要素に言及しながら答える。前後の文脈や主語がどういふものか、目的語についてなど、対象者の言及した様々な要素や、対象者は気づいていないが筆者が重要と思った要素などからリストの元が想起される。そして実践後に筆者が対話内容を改めてコア理論を活用しつつ分析し、見出したものを「状況に埋め込まれた関係性」のリストに加えていくという流れでリストが作成される。

3.2 「深い」知識とは何か

Read[2000]や Nation[2001]の研究では、語彙知識の「深さ」として語彙知識の質的な側面を分析している。しかしながら、質的側面の研究とはいえ、語の意味に関する知識の質を問う分析は十分に行われていないのではない。

「深さ」を分析しようという他の研究においては、語の一つの意味だけでなく更に多くの意味を問う形式のテストが開発されている。これは一見質を扱っているように思われるが、単に一つの語の中での知識の「幅」を扱っているに過ぎず、「深い」知識を問っていると考えるには不足がある。

筆者は、一つの語の知識は、一つの語だけで成立するものではないと考える。すなわち、ある語に関する知識は、語の内部のみならず、他の語との関係性の中に存在すると考える。語に関する知識の「深さ」とは、単語の内部のみならず他の語や、文脈などの「語の外部」に生起する知識を理解していることである。

他の語との関係性を理解することは、第二言語学習者にとって非常に重要である。第二言語学習では、語の意味を覚える際に母語との対訳で理解することが多い。しかし、言語間の対訳は必ずしも同じ概念・指示対象を指すものではない。したがって学習者は学習対象言語の語の一つ一つに対して、語の使用可能範囲を理解しなければならないということになる。それはすなわち、ある語を他の語と区別し、そしてその語が表現できる事態の可能性を知ることである。

4. 「状況に埋め込まれた関係性」

4.1 7種の「状況に埋め込まれた関係性」

筆者は実践を通して、7種類の「状況に埋め込まれた関係性」を見出した。「状況に埋め込まれた関係性」は、以下の7種である。

(1) 「動詞」vs.「動詞」間に生起する知識

“動作の程度の差異に関する知識”として、例えば「泣く」に対する cry, weep, sob…や、“身体の使い方と意識の向け方”に関する違いとして例えば「見る」に対して see, watch, look…などといった表現。これらは類義語として扱われるが、それぞれの動詞がどのようなコアイメージを持っているかを理解し、使い分けが必要である。

(2) 「主語」×「動詞」間に生起する知識

同じ訳語でも主語の形質によって動詞が変わる表現。例えば pour や flow のように、主語が液体や気体であることが動詞選択に関わるというもの。

(3) 「目的語」×「動詞」間に生起する知識

事態における目的語と主語の関係性で動詞選択を行う。前出の綱と「つかむ」の関係などが好例である。

(4) 「主語」×「目的語」×「動詞」間に生起する知識

主語と目的語の“からだ”が動詞を決定する例。(2)と(3)が複合的に現れる例である。

(5) 「文脈」×「動詞」間に生起する知識

前後の文脈によって使うべき動詞がきまる例。あるいは含意するものを含む。「立ち去る」という際に depart と go では、depart は単に場を離れるのに対し、go は立ち去った後に行く場所などが含意される。

(6) 「視点」×「動詞」間に生起する知識

「内部観測」と「外部観測」といった視点の取り方や、認識の文化的差異に関する例。これを意識するには視点の「からだメタ認知」[諏訪 2012]が求められる。

(7) 「構文」×「動詞」間に生起する知識

動詞は他の語だけでなく構文との共起も無視できない。3 文型は取れるが 4 文型は取れないといった例が当てはまる。

これらは、筆者の持つ「動詞の使用知識には、動詞と他の語との関係性の中に埋まっている知識があるはずだ」という問題意識のもと、筆者が実践の中から見出したものである。本稿では紙面の都合上、例として(1)に絞って補足する。各項目の詳しい内容は[福島 2013]を参照されたい。

(1)の「動詞」vs.「動詞」間に生起する知識は、動詞と他の語との関係性を考える際には、ある動詞と他の動詞の関係性をまず考えなければならない。他の動詞とは基本的には動詞選択の際に選択肢にあがる類義的な動詞である。類義語との使い分けをどのように行っていくかは、まさに語と語の間に存在する知識であり、単一の動詞の内部のみからは発見できない知識である。

4.2 「動詞」vs.「動詞」間に生起する知識

本項では、表 1 に示した 7 種の関係性のうち、「動詞」vs.「動詞」間に生起する知識を取り上げ、被験者との対話からこの関係性を見出した際の実践の詳細を示したい。

(1) 教示内容

本実践は筆者の友人 E を対象に行なった。E は英語教育の研究室に主要メンバーとして所属しており、E 自身も小学生の英語教育に問題意識を持っていることから、本研究の内容と実践の意図を簡単に紹介し、実践に協力してもらった。

事前に E に与えた情報は、実践が動詞知識の深さとはどのようなものと考えられるかを考察するためのものであるということ、そして筆者の仮説として「主語や目的語などといった他の語との関係性の中に動詞知識の深さは見られる」という内容を提示するものであった。

和文英訳の実践時にはメタ認知的に英訳をしてもらった。筆者は E に「動詞の選択に注意して、複数の動詞選択の可能性がある場合にはそれらの選択肢を書きだし、後で動詞選択の根拠を語れるように」と教示して実践を行った。

(2) E の訳出

E には河野訳『星の王子さま』[河野 2006]の中から任意の箇所を選択するように指示した。E は 23 章(pp.111-112)を選択した。

物売りは、のどの渇きをいやすのに、とてもよく効く薬を売っていた。一週間にひと粒飲めば、もうなにも飲みたいとは思わなくなる。

「どうしてそんなものを売ってるの？」王子さまは聞いた。

「すばらしく時間が節約できるようになるからだ」物売りが答えた。「専門家が計算したところ、一週間に五十三分の節約ができる」

「それでその五十三分をどうするの？」

「好きなことに使うのさ……」

〈ぼくなら〉と王子さまは思った。〈もし五十三分あったら、そっと、ゆっくり泉にむかって歩いていくよ……〉

E はこの章の最後の一文を訳出した。E が提示した訳は以下の通りである。

If I had extra 53 minutes, I would walk toward a fountain slowly and gently.

(3) 対話内容

E による訳出ののち、下線を施した動詞(句)を中心に対話を行った。まず筆者は walk という動詞を用いたことに着目し、walk のほかにどのような動詞が選択肢としてあったかを尋ねた。すると E は walk のほかに“go”も選択肢として浮かんでいた、とした。

この時点で筆者は、E の言わんとしていることを付度し、認知言語学における「結果志向」と「過程志向」[池上 1981]がここでは動詞選択の鍵となっていることに気づいた。その上で E に、「go と walk は、指す行為やどこに着目するかが異なるのでは」と投げかけた。これに応じて E は、「動詞選択時に go か walk かの選択肢があったが、泉に行くことが目的ではなく 53 分間の使い方としてぶらぶらと散歩するというイメージのため、walk を使った」とした。

筆者はこの志向性の違いに E も暗黙的に気づいていると考え、直後の“toward”についても質問を行った。質問に際しては“to”と“toward”のコアイメージの違いを念頭においている(両者の違いは次項で詳説する)。

筆者が、「訳出に“to”ではなく“toward”を用いたのはなぜか」と指摘すると、E は「to だと直接的に“行った”(筆者注:到達した)ことが表現されるが、“toward”だと泉の方へ行った(筆者注:泉の方角に移動した)だけであり、ぶらぶらと歩いたことが表現できる」とした。

次項では go と walk の違いを、to と toward の違いを借りて説明するが、go と walk のコアイメージを形成する志向性の違いによって筆者は今回のような対話を行うことができた。

(4) 分析

Howard[1946]は、今回の箇所について以下の表現を行なう。

“If I had fifty-three minutes to spend as I liked,” the little prince said to himself, “I’d walk very slowly toward a water fountain...”

出典:[Howard, 1946, p.66]

ここでは walk に着目する。「もし五十三分あったら、そっと、ゆっくり泉にむかって歩いていくよ……」という日本語に対して、E は動詞に walk を用い、前置詞に toward を用いている。この表現は Howard にも共通して見られ、ネイティブの感覚にも近いと思われる。

ここで walk 以外の表現可能性として、walk toward a fountain ではなく、例えば go to a fountain といった表現も可能である。walk と go の含意するものの差異はどのような点に現れるだろうか。

筆者はその差異が「結果志向」と「過程志向」にあると考える。動詞のイメージのうち、結果が焦点化を受けるか、過程が焦点化を受けるかという点である。

go はモノの「場所から場所への移動」に焦点が当たっており、どちらかと言うと結果志向的である。対して walk はある場所に到達することよりも、移動の手段、過程としての「徒歩」に焦点が当たる。

E の回答と Howard の双方において今回 walk と同時に用いられた toward についても同様の選択が行われている。E は「to は目的地に到着しているところに焦点が当たるが、toward は目的地や到着するかどうか曖昧性があり、漠然と移動の方向性を示すイメージ」と述べている。これらは前置詞に対するイメージだが、コアをよく捉えた好例であると考えられる。

動詞には志向性がある。一般的なものとしては「結果志向」と「過程志向」といった志向性がある[池上 1981]。志向性とは、動詞を用いて事態を構成する際に、どの部分を焦点化するかという点に関わる。ある動詞の持つイメージが、動作の結果に焦点が当たるか過程に焦点が当たるかを理解しておくことは、第二言語学習において重要な要素であると筆者は考える。それは、動詞の志向性は言語によっても傾向の違いが見られ、母語の志向性の枠組みが外国語学習において干渉する場合があるためである。このように日本語と英語では志向性が異なる動詞の用法があり、これらを適切に理解しておくことが動詞の活用において重要である。

5. 本研究の応用

5.1 学習者への応用

「状況に埋め込まれた関係性」のリストを学習者が活用すると、語彙知識の新たな指針となることが期待される。これまで学習者が自分の英語能力を自己評価しようとするときには、明確な指針というものがないのではないだろうか。

語彙知識ひとつを取ってみても、自分がある単語を知っていることが「何であるのか」、「どうであるのか」、一体自分に何ができるのかということを示してくれるものはなかった。それがために、学習者は学習の目標を立てることができず、単なる量的数値を目標とするしかなかった。

本研究を通して筆者が見出した「状況に埋め込まれた関係性」を理解し、学習の指針とすることは、こうした問題に対する解答を与えてくれる。たとえば、「状況に埋め込まれた関係性」のリストは、英語動詞の類義語との使い分けを意識し、どのような主語と共に用いられることが多いのかを理解しつつ学ぶことを示唆してくれるだろう。あるいはある動詞がどのようなコアイメージを持っていて、それがどのような目的語を変数として受けるのか、主語のからだはどのようにコアイメージに作用するのかなどは、これまでの学習方法では意識されることはなかったのではないだろうか。「状況に埋め込まれた関係性」のリストを活用することにより、こうした動詞単独の知識ではなく、他の語や「視点」、「文脈」などといったものとの関係性の中に生起する知識を学習意識の俎上に載せることができると期待している。

5.2 指導者への応用

「状況に埋め込まれた関係性」のリストは指導上の指針となる。言語を教えるということは困難を極める。状況に埋め込まれた関係性を意識することで、単に語の意味のみに焦点を当てるのではなく、語彙の活用と他の語との関係性に着目した指導を行うことができる。また指導法のみならず、学習者の評価方法論にも応用が可能である。

これまで学習者の語彙能力評価は、語彙をどれだけ知っているかといった量的側面は計測が可能であったが、質的側面は評

価項目が十分ではなかった。この「状況に埋め込まれた関係性」のリストを念頭に置いた指導を行い評価することで、学習者が文脈に応じて動的に動詞知識を活用する能力を見とることができる。

6. おわりに

言語は、人間の身体に根ざしている。身体の物理的特性が言語の有りようを規定し、言語は身体に強く動機づけられている。さらに筆者は、「身体」には人間の物理的特性のみならず、これまで個人が生きてきた経験、知識と認知能力を含むと考える。そうしたすべての身体的基盤と、おなじく身体をはらんで生きる他者との間に、生の言語の営みというものは成立する。

本稿では、語彙知識の深さとは何かを議論した。人が生きる中で言語を使用するとき、そこに生起する「語の知識」とはいかなるものか。意味構成の最小単位としての「語」というものが、人が生きる状況のなかでどのように他の要素と関わりあいながら意味づけられていくのか。本稿では以上の点を、英語動詞を例に考察した。

本稿で筆者は[これまでの語彙知識研究では扱われてこなかった、新たな知識群として「状況に埋め込まれた関係性」を提言した。筆者は本研究を通して英語動詞の「状況に埋め込まれた関係性」に7種類を見出した。これらは英語動詞をハブとした文脈の中での語彙知識ネットワークであり、視点を変えることによってさらに多くの関係性が見出されることは想像に難くない。

本研究は、動詞の知識の在り処を、動詞の内部のみに求めるのではなく、他の語との関係性の中に見出そうとした研究である。ことばは、常に文脈の中で紡ぎ出される。

本研究では、一人の話者の中の語彙の意味づけを扱った。しかし本来ことばとは他者との対話に供せらるべきものであり、一つのことばは他者との状況の相互付度の中で意味づけられるものである。深谷・田中[1996, 1998]はこうした意味のあり方を「コバの意味づけ論」として提唱し、意味とは語に備わっているものではなく、他者との意味づけの相互作用の中に存在するものとした。本研究では個人のメンタルレキシコンとしての動詞知識を扱ったが、今後の研究としては他者との意味づけの相互作用のなかでどのように語彙知識が獲得され発展していくのかを扱っていく必要がある。

参考文献

- [池上 1981] 池上嘉彦: 「する」と「なる」の言語学, 大修館書店, 1981.
- [深谷 1996] 深谷昌弘・田中茂範: コバの〈意味づけ論〉, 紀伊國屋書店, 1996.
- [河野 2006] 河野万里子: 星の王子さま, 新潮社, 2006.
- [Nation 2001] Nation, I. S. P, *Learning Vocabulary in Another Language*, Cambridge University Press, 2001.
- [Read 2000] Read, J, *Assessing vocabulary*. Cambridge University Press, 2000.
- [Saint-Exupéry 1946] Saint-Exupéry, Antoine de: *Le Petit Prince*: Editions Gallimard, 1946/ 1999.
- [諏訪 2012] 諏訪正樹: “からだで学ぶ”ことの意味, KEIO SFC JOURNAL, Vol.12, No.2, 慶應義塾大学湘南藤沢学会, 2012.
- [田中 1998] 田中茂範・深谷昌弘: 意味づけ論の展開, 紀伊國屋書店, 1998.
- [田中 2005] 田中茂範・アレン玉井光江・根岸雅史・吉田研作(編著), 幼児から大人までの一貫した英語教育のための枠組み: English Curriculum Framework (ECF), リーベル出版.
- [田中 2006] 田中茂範・佐藤芳明・阿部一: 英語感覚が身につく実践的指導: コアとチャンクの指導法, 大修館書店, 2006.